2010年イカ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

	数量										
	漁獲		産地					輸入			輸出
年	スルメイカ	アカイカ	スルメイカ			アカイカ		マツイカ	コウイカ	調製品イカ	イカ
			生	冷近	冷遠	生	冷				
21	218.7	36.0	88.5	43.0	0.8	0.0	10.9	59.0	19.0	44.5	27.8
22	184.1	16.6	96.2	34.7	1.1	0.0	3.8	59.4	18.9	44.2	31.3
%	84	46	109	81	143	200	35	101	100	99	113

	数量										
	東京			在庫量			消費支出	加工品			
年	スルメイカ		コウイカ	スルメイカ	コウイカ	その他	生（グラム）イカ	イカ製品	イカ塩辛	干スルメ	燻製
	生	冷	冷								
21	13.2	4.3	0.4	46.8	6.2	30.0	2,900	34.6	22.5	7.6	11.2
22	10.8	4.4	0.3	31.1	5.9	22.8	2,583				
%	82	104	75	66	96	76	89	0	0	46	0

	価格											
	産地					輸入		輸出	東京			消費支出
年	スルメイカ			アカイカ		マツイカ	コウイカ	イカ	スルメイカ		コウイカ冷	生（円）イカ
	生	冷近	冷遠	生	冷				生	冷		
21	169	220	176	441	295	363	669	126	398	328	567	2,657
22	226	282	219	133	514	433	661	155	426	338	601	2,494
%	134	128	124	30	174	119	99	123	107	103	106	94

スルメイカの資源

平成年代に入って日本近海のスルメイカの漁獲は、平成10年を除くとかなり安定的に推移しており、20～40万トン台の高い数字を記録しているが、本年は20万トンを割っている。

太平洋側の漁獲の殆どを占める冬生まれ群（冬季発生系群）の資源量は、1981～1988年の間は30万トン以下の低い水準で推移していたが1989年以降増加に転じ、1996年には133.4万トンにまで増加した。その後は大きく変動する年はあるものの、概ね80万～120万トンの高い水準で推移している。第一次漁場一斉調査から推定した2010年の資源量は69.4万トンであった。親魚尾数は資源量と同様に1980年代後半から増加傾向を示し、1993年には15億尾に達した。その後は6億～14億尾で推移していたが、2010年級を産んだ親魚尾数は16億尾に増加した。資源水準は過去32年間の資源量の推移から中位、動向は2006～2010年の5年間の変化から横ばいと判断されている。

秋生まれ群（秋季発生系群）の資源水準は、1980年代の資源量は主に50万トン前後（1981～1989年の平均値は51.2万トン）であったが、1986年は22.4万トンとなった。しかし、1990年代以降は増加傾向となり、1990年代の平均資源量は108.7万トン、2000年前後には主に150万～200万トンとなった。2004～2007年は90万～130万トンに減少したが、2008年は171.4万トン、2009年は148.5万トンに増加した。しかし、2010年の資源量は118.8万トンに低下したと推定され、漁獲割合は1980年代半ば35～40％、1990年代は30％以下、近年は20％前後に減少し、2009年は12.9％であった、といわれている。

産 地 水 揚 量 と 価 格

22年の日本近海のスルメイカ水揚量（継続漁港）は生9.6万トン（前年：8.9万トン）、冷3.5万トン（前年：4.3万トン）と生鮮はやや増加、冷凍は減少となった。

ＴＡＣに基づく漁業種類別漁獲量はトロール3.8万トン（前年：4.5万トン）、まき網1.41万トン（前年：1.35万トン）、釣りの冷凍3.1万トン（前年：4.4万トン）であったが、釣りがほぼ前年並み、トロールやや減少、巻き網は前年並み、中型船凍船減少であった。

冷凍は、本年も昨年同様当初北陸船団が日本海スルメイカ主体の操業をし、青森、北海道、岩手船団がアカイカ（ムラサキイカ）操業であったが、アカイカは年明け後の前年度漁期の最終航海が極めて低調だったうえ、年度明けの初漁期も極めて低調、水揚げも少なかった。しかも、秋から冬場の漁も皆無で推移した。

生スルメイカの海域別漁獲量は、日本海10,339トン（前年：4,289トン）、太平洋74,734トン(前年：64,208トン)、オホーツク4,188トン（前年：0トン）で、特に太平洋・日本海・オホーツクとも増したのが特徴である。また九州北部での漁獲は3,658トンで前年(4,555トン)を下回った。

本年も中型船凍船は、当初スルメイカとアカイカ操業とに分かれたが、その後は一部太平洋操業もみられたが、日本海操業が主体で漁獲量は前年を下回った。

また本年も業界では、従来からスルメイカ一極集中の排除、三極漁場の選択的移動、漁獲努力量の分散、急速凍結によるブロック製品の品質向上等付加価値の高い魚種や製品作りの奨励、サイズ選択、IQFの促進、アカイカの高度利用等は定着している。

産地価格は、生鮮226円（前年：169円）、冷凍は282円（前年：220円）となり生鮮・冷凍も漁期前から在庫の不足や海外での漁不振等もあって何れも上昇した。

本年の特徴は、①本年の冷凍スルメイカは水揚げも少なかったが、IQF生産も前年を大きく下回った、②本年のイカ類の魚価は在庫が少なく、国内外での漁不振等もあって久しぶりに堅調な相場推移であった、③本年の冷凍スルメイカ（Ｒ）のサイズ組成は、21～25尾サイズが30%で前年（22%）を上回り、26～30サイズも24%で前年（24%）並みであった。サイズ組成も20尾以下の大型は27%で前年（20%）より多く、昨年に大型化が目立った、④ＡＲ、ＦＯＲの漁場がなくなり、ペルー水域、ＮＺ、ロシア等になり海外イカ類の漁場は狭隘化している、こと等である。

在　庫　量

22年は昨年より更に少ない5.8万トンの在庫から始まり、本年も例年通り６，７月に最低になったが、その数量は2万トン割れとなり近年では最も少ない数量であった。その後、秋以降は例年どおり増加に向かったものの、昨年並みにまで回復することなく在庫は減少した。この結果、越年在庫は4万トンと昨年をかなり下回る在庫となった。平均在庫量も、3.5万トンで、引続き前年（4.7万トン）を下回った。

消費地入荷量と価格

スルメイカの東京消費地入荷量は、生1.1万トン（前年：1.3万トン）、冷凍4.4千トン（前年：4.3千トン）であった。本年は太平洋生イカ漁が比較的順調であったが、後半型で旬から少しずれていたことで生鮮の入荷が前年をやや下回った。価格は、生426円(前年：398円)、冷338円(前年：328円)で生・冷とも産地同様強かった。

消費支出でみると購入数量、購入金額とも引続き前年を下回った。

ＮＺイカ

22年のＮＺイカ釣漁は、本年は２隻、0.8千トンで前年（２隻、0.8千トン）をやや上回った。

産地水揚量（全漁連）は、1,085トンで前年（759トン）を上回った。

価格は219円で前年（176円）をやや上回った。

アカイカ

本年は初漁期から低調な漁模様であったが、その後秋から冬にかけては昨年以上に極めて低調で漁皆無であった。また沖合（東経170度以東水域）の漁は１隻当たりの漁獲が56トン（前年94トン）で低調であった。小型船による近海での漁獲は昨年の1トンと変わりなく極端に少ない3トンの水揚げに終わった。

全漁連集計によると、生3トン（前年：1トン）、冷0.4万トン（前年：1.1万トン）であった。

産地価格は、生179円（前年：223円）、冷514円(前年：295円)であった。

海外アカイカは、ペルーのみ(200海里内)の操業であったが、4隻-17.1千トンで、昨年実績（4隻-27.3千トン）を大きく下回った。

本年のペルーアカイカの耳とりのサイズアソートは5尾以下が96%（昨年は5尾以下95%）と昨年同様に超特大サイズが多かったが、今年は中でも比較的小型サイズ（2-5尾サイズ）も多く高値推移となった。

産地水揚量（全漁連）は、14,205トンで前年（16,410トン）をやや下回った。

価格は132円で前年（90円）を上回った。

輸入イカ

22年の輸入イカ（コウイカを除く）は、中国主体に5.9万トンで下半期の搬入が多く前年（5.9万トン）並みまで戻した。

価格は、433円と久しぶりに前年（363円）を上回った。

冷凍イカの主要輸入国は、中国26,632トン（前年：23,683トン）、タイ7,594トン（前年：6,871トン）、ベトナム5,360トン（前年：5,502トン）、米国6,283トン(前年：4,035トン）、フィリピン1,119トン（前年：845トン）、インド2,134トン（前年：1,322トン）、NZ506トン（前年：1,449トン)、ペルー4,832トン（前年：10,451トン）、アルゼンチン395トンで（前年：3,040トン）前年以上に中国のシェアが高かったが、今年はペルーを始め漁が不振であった南半球から搬入が減少したのが特徴。

22年の輸出は、3.1万トンで前年（2.8万トン）をやや上回ったが、本年も中国、ペルーの両国で２/３を占めている。

モンゴイカ

22年のコウイカの輸入は、1.9万トンで前年（1.9万トン）並みであった。

輸入価格も、661円で前年（669円）並であった。

東京消費地入荷量は、0.3千トンで前年（0.4千トン）をやや下回り引続き漸減傾向が続いた。

価格は、601円で前年（567円）をやや上回った。